

家文

あと少しで約束の15:00だ。

隆志は大学からの帰りで、駅の改札にもうすぐ来るはずの美優を待っている。

二人のデートはいつも行き当たりばったりで今日も特に行き先は決めていない。遅めのランチを食べ、雑貨屋などを回りながら互いの日常を少しずつ話しては茶化したり相談に乗ったりする。

二人には互いにれっきとしたパートナーがいる。美優には彼氏がいるし、隆志にも彼女がいる。だから体の関係もないしキスもしたことはない。酒が入っても、せいぜい手をつなぐ程度だ。だからこそ何の遠慮もなく心の内を明かし受け入れあえる。互いにパートナーでは満たされない部分をカバーしあっている。ただそれだけの関係だ。

隆志と美優は価値観が似ていた。互いの感性に新鮮さを感じ、それに触れ合うことが心の中の敏感な粘膜のような部分を刺激した。

二人のお気に入りの喫茶店『るばん』は駅ビルの最上階にある。祖父が喫茶店を営んでいた美優が「おじいちゃんのお店に雰囲気似ている」と探してきた店だ。

入り口にはアンティーク調の木目の椅子が一脚あり、マスターのちよつとした「一言」が書かれた木製の小さい看板がその椅子の上に掛かっている。このマスターの「一言」も二人のお気に入りだった。今日の「一言」は大きい文字で

『スターバックス』

そのあとに小さい文字で『から徒歩二分』と書かれていた。

店内は縦長の間取りで、カウンターの向かいに細い通路を挟んで二人掛けのテーブルが四席あるだけだ。入り口を入れて右側は足元から天井まで全面ガラス張り、街を一望できるが、決して直射日

光が差し込まないように陽差しが備え付けてあり、白いレースカーテンが支柱に束ねてある。テーブルには真っ白なテーブルクロスが掛けられ、窓から入る陽の光をうっすらと反射し、座っている人の肌を自然に透き通ったものに見せた。

表の看板とは裏腹にマスターは物静かで、こちらから話しかけない限りは無言だ。たつぷりと蓄えられたもみあげが店名の由来だろう。体型こそ「機関車トーマス」に出てくる「トップハム・ハット卿」にそっくりだが几帳面に整られた白銀に近い髪が彼に寡黙であることを許していた。

BGMのジャズも微かに聞こえる程度にボリュームが抑えられ、「俗世界の離れ家」を十分に堪能できるよう演出がされている。

ここ『るぱん』に入っても話すことは多岐に渡る。

前日のテレビの話から、景気、互いに貸し借りしてる小説の感想、どこのラーメン屋が美味しいとか、新発売の携帯の機能、とたわいないことがほとんどだ。

しかし一つだけ隆志の胸をかき乱す話題があった。美優の彼氏についてだ。

いつからか美優と彼氏の話を知ると顔が表面の皮膚一枚を残して引きつるのを覚えた。ぬかるんだ泥まみれの古井戸の底から這い上がるようにするもう一人の自分を、無理矢理もう一度井戸の底に蹴落とす。聞き取れないが、もう一人の自分は確かに何かをうめいている。隆志はその声に耳をかさないように努め美優の横顔を眺める。

隆志は美優の横顔が好きだった。スツと通った鼻筋が彼女のどんな仕草にも気品を添えているような気がしたからだ。

二人は堂々と会っていた。

もともとバイト先で知り合った友達という関係なので、友達と遊んでいるだけと言えば確かにただ

それだけだ。もちろん互いの恋人には内緒だったが、これだけ普通に歩いていれば知り合いに会ってもおかしくない。もしそんな場面に出くわしたら隆志は何と言いい、美優は何と言うのだろうか。隆志はそれを聞いてみたい気もしたが、この心地良い関係が壊れるのは避けたかったし美優の笑顔が曇るような問いはしないでおこうと決めた。

二人は多くても二週に一回くらいしか会わない。休みが合うとは限らないし恋人だっている。

隆志は誰とも約束がない休みには歩いて10分くらいの図書館に出かけることが多い。赤レンガ調の花壇の先に入り口、そこを入ってすぐ左側に上の階へ続く階段があり右側には貸し出しカウンターがある。その更に先に背の高い本棚がいくつも並び、少し離れた奥のスペースに児童コーナーがある。階段の踊り場には地域の児童が描いた防災のポスターが貼られていて、二階は持ち出し禁止の大きな書物とそれらの閲覧用の机がある。三階は長机がいくつも並んでいて、試験勉強している高校生や一階で選んだ本を読んでいる人が自分の世界に没頭しつつも細く張り詰めた静まりを共有していた。

隆志は三階の窓際、見晴らしのいい席に座ってただただページに自分をすりこんでいく。たまに外を眺めては本と現実の媒介として機能する自分が熱を帯びて浮き彫りになるのを感じる。誰にも見せたことのない秘密の部屋の窓をそっと開けて空気を入れ替えるようなこの感覚が隆志の心の新陳代謝を一気に押し進め、瑞々しい光を内包した塊が古くひび割れた表皮を内側から突き破るかのごとく姿を現す。それが流れすぎていく隆志の日常に鮮やかな体温を与えた。

面白い本が見つければ作者と題名と出版社を控えておく。

美優が興味を持ったときにすぐ本屋で探せるようにだ。

この図書館には「図書館の主」と隆志が勝手に呼んでいる初老の女がいて、いつも三階の一番奥の席に座っている。誰とも会話を交わしているのを見たことはないが、図書館という場を考えればさして不自然とも思えない。どんな本を読んでいるのか気にはなったが、窓際の角に座っているので回りこんで本の表紙を見ることが出来ない。隆志は密かにこの「図書館の主」と話してみたいと思っていたが、最近はその姿を見せなくなっていた。

図書館での隆志の本の選び方は少し変わっている。まず小説が並んでいる一角に立つと、人がいない通路を選ぶ。選んでいる間に人が来たら、通路を変える。あとは、ピンと来た題名が目に入ったらそれを読む。途中でつまらなく感じても最後まで読むのが隆志なりの礼儀だった。だからあまり厚い小説には手を伸ばさないのが癖になりつつあった。本を選んで窓際の席に座ると携帯電話にメールが入った。彼女の理沙からだった。

「今日の夜会える？」

「うん。いいよ。」時計を見ると、針は14:00を指している。

「今何してるの？今日は早く授業終わるから。」

「珍しいね。図書館で本読んでるよ。」

「また図書館なんだ(笑)」

「もうちよいと詰めれば、関係者用ドアを使っても怒られないかも(笑)じゃあ終わったらまた連絡して。」

「うん。またね。」

いつの間にか太陽は雲に出し抜かれ、姿を消していた。

隆志は図書館を出て一度家に帰ることにした。予報とは裏腹に崩れた天気 of せい で家に着く頃にはジーンズの裾が濡れ、本来の色を取り戻しかけていた。もし雨に降られ続ければ、この足元から迫り来る感情の波に全身を委ねることになるのだろうか。雨音が雑音をかき消しひとりであることを肯定したが、隆志は自分でも可笑しな考えだと改め直し、玄関のドアを開けた。

部屋着に着替え濡れた髪をタオルでふきながら、ふと思いついたことがあった。タオルから自然に香ってくるのは美優に教えてもらった柔軟剤の香りだ。隆志はタオルに顔をうずめて大きく息を吸い込んだ。たしかこの柔軟剤を教えたもらった日も雨だった。その日していたレモンイエローのイヤリングが似合っていると褒めたら照れていたのを思い出す。

もうすぐ美優の二十歳の誕生日だ。プレゼントをしなければいけないわけでもないし、すると決めたわけでもない。それでもカレンダーの一月三十日と目が合うのはもう何度目だろうか。

携帯が鳴る。美優からのメールだ。

「もうすぐ誕生日だからプレゼントよろしくねー♪」

「彼氏にももらえるじゃん。」

「それはそれ、これはこれ。楽しみにしてるから。」

「ドモホルンリンクルでいい？」

「私、今年でまだ20なんですけど！」

「冗談だよ。まあ、忘れなければね。」

自分からプレゼントをねだってくるあたりが美優が隆志に気を許している証拠だった。美優は他人に甘えたりするタイプではない。だからこそ隆志は素直に嬉しかったし、それを受け入れてもらえることに美優も喜んでいた。

また携帯が鳴る。今度は理沙からのメールだ。

「今終わったよ。まだ図書館？」

「おつかれさん。もう家にいるよ。外で御飯食べようか。傘持ってる？」

「お腹減った。傘持ってる。」

「じゃあ理沙の分も持って行くよ。18:30に駅の改札で。」

隆志は改札前で二人分の傘を持っている。

ごった返す人の流れを少し離れた柱の横から眺め入る。激しい川の流れ。その端の岩陰で流れから取り残され淀んでいる水。そこに落ちた葉は何度流れに身を投じようとしても弾かれてまた元の淀みに戻ってきてしまう。隆志はその葉に自分を重ねた。

その川の流れに全身で太陽を乱反射する魚を見た。美優だった。

溢れるほどの人の中で瞬時に美優が目に入ったことに隆志の心臓は嬉しさと切なさで二つに割れた。美優も隆志に気付き小走り駆けて寄ってくる。

「美優どこか行くの？」

「彼氏に呼ばれてさ。隆志は？」

「うん。」少しもった隆志の腕に二本の傘があるのを見て、美優はいたずらな視線を送ってきた。「理沙ちゃんか、じゃあ私行くから。理沙ちゃんにもよろしく。」そう言ってまた人ごみに消えていく美優の背中と肩の細さが隆志のため息を誘う。

美優と理沙は同じ年だが面識がない。美優は隆志から理沙の話を知ったことがあるだけだ。だから隆志は「よろしく」言えるはずもないのだ。

もし自分が同じことを言ったら美優は彼氏に自分のことを笑って話すのだろうか？また古井戸の奥で声がする。日に日に、少しずつではあるがうめき声が大きくはつきりとしてきたような気がする。目の前を通りすぎる人たちが、メインイベントを見終わったとたん席を立つ観客のように思えた。

駅の時計は18:30を回っている。次の急行で理沙が着くだろう。

川の流れが心だけを連れ去ってしまい、よく出来た人型の模型に動力を与えただけの人形がそこに残った。

急行が到着し、改札前が再び人で溢れかえる。ふと美優の消えていった方向に目をやる。その時だ。隆志の横腹にこそばゆい刺激が走った。

「待った？」理沙だった。

理沙は隆志の脇腹が敏感なのを面白がってよく人差し指で突いた。

「やめろってば。そんなに待ってないよ」



「どうせ可愛い子を目で追ってたんでしょ？」

冗談ぼく笑って見せる理沙に隆志は聞こえないふりをした。

雨足が一層強くなった。

理沙との夕食は最近駅の近くに出来たばかりのイタリアンレストランでとることにした。店に入ると女性の店員がすぐに笑顔で案内してくれてた。

「りっちゃんホントに来てくれたの？ありがとう！何か緊張してきたなあ。噂の彼氏さんだ？初めまして、吉田麻衣です」

理沙の大学の友人がアルバイトで働いてるらしい。

「初めまして、広岡隆志です」

「りっちゃん学校でもモテモテだから、どんな彼氏さん連れてくるかと思ってたんだけど。やっぱり思ったとおり、優しそうな人で安心したな」

褒め言葉かどうか判断に迷ったが他意はないらしい。

「吉田さんはこの辺りに住んでるの？」隆志は当たり障りない質問で間を埋めた。

「このすぐ近くです。暇なときはこのへんブラブラしてるんで見かけたら声かけてくださいね！」他のテーブルのオーダーを受けに二人から離れていった麻衣の言葉に隆志は少なからず動揺し、それを理沙に悟られないよう話題を変えた。

「学校はどう？」理沙は大学二年生でもうすぐ定期試験の時期だ。

「うん、普段ちゃんと授業聞いてるから平気。誰かさんと違ってね」隆志は去年、留年ギリギリで何とか三年生に進級出来たのだ。

二人が初めて会ったのは互いの友人が開いた飲み会だった。こういった飲み会に何度か参加したことのある隆志は、正直乗り気ではなかった。過去の統計から言っても容姿の良い子が参加する確率は極めて低い。だからこそ少し遅れてきた理沙の顔を見た瞬間の、照明のワット数が一斉に上がったような男どもの反応は抜けかけた気合いを入れ直してるのが向かいに並んだ女性たちにもしっかりと伝わっていたほどだった。「掃き溜めに鶴」と言えば同席していた他の女性たちには失礼だが、その言葉が一番しつくりきた。

「何で来たの？」

付き合い始めてから理沙の口から語られたことだが、ボソツと言った隆志のこの最初の一言が理沙が隆志に興味を持ったきっかけだった。コンパに来た理由を聞くこと自体、ひどく不自然なことだ。つまりこの短い言葉の中には「自分は人数合わせだよ。君もそうだろ？」「何で君みたいな可愛い子が？」といった意味が含まれていたし、何より「君に興味がある。二人だけで飲もうよ」というメッセージが込められていた。

隆志の発したユーモアを瞬時に読み取った理沙の答えはこうだった。

「電車で来たよ」

他の男友達はその答えに、「家はどこ？」「学校は？」などど食いついたが隆志は理沙の頭の回転の速さが気に入ったし、理沙も正しくメッセージが伝わったことに満足感と出逢いを感じていた。その日、隆志と理沙は連絡先を交換し数日後には二人だけで合うようになっていた。それから大した間も置かず、どちらともなく互いの家を行き来するようになり言葉より先に「付き合っている」関係になった。

その一ヶ月後だ。

隆志のバイト先の古本屋に美優が新人として入ってきた。第一印象は「生意気そう」だった。今でもそれは間違っていないかったと隆志は思っている。初めに隆志は注意した。

「そのイヤリング外してきて、営業中はダメだから」その時はまだ、のちに「似合ってる」と褒めるとは夢にも思っていなかった。

作家順、ジャンル順、出版社順の並び、漫画、小説、エッセイ、趣味本、写真集…ひと通り教えるのと、美優はすぐにアダルトコーナーに居座った。しばらくすると、レジで接客する俺の足元に表紙の裸の女がよく見えるようにポルノ雑誌をそっと置いた。何事もないように客を見送ってから叱りつけてやろうと振り向くと美優はまたどこかに消えていた。

隆志は足元の雑誌を拾い上げ眺めていた。

「お客さん、そういうのが趣味ですかあ〜？」悪戯な光を灯した目で美優が現れた。

怒る気も失せ、呆れに近いため息をつく。

「私、これよりもうちよつと胸ありますよ」と言っつてその雑誌を隆志から取り上げると、元あった棚に戻した。

隆志は自分や理沙とは違った奔放な美優の感性に、この先惹き込まれていくような気がした。

「隆志って女友達とかいないの？」食事の最中、理沙は唐突に言い出した。

「ん、いるっちゃいる」

こんなことを聞いてきたのは初めてだった。

「ふ〜ん」理沙は隆志の目を黙って見つめ、隆志の瞳の奥から何か不純物が浮き出してくるのを待

っているようにも思えた。

「理沙は？さっきの子がモテるって言ってたけど」

「モテる…のかなあ？よく分かんない」まるで他人ごとだ。

「隆志は明日午後からだよね？私も午後からだから泊まってるいい？」隆志の部屋に泊まった日は理沙が二人分の朝食を作る。サンドイッチなど簡単なもの多かったが、その甲斐甲斐しさが隆志は嬉しかった。

「いいよ」そう返事すると理沙は早々に店を出たがった。隆志もあまり長居したくなかったし、この店にはもう来ないことにした。

隆志の家に向かう道中、傘をさして左側を歩く理沙は吐いた息が白くなるのを見ながら言った。

「ねえ、今日さあ…告白されちゃった」

「えっ!?誰に？」

「学校の友達」

「で、どうしたの？」

理沙はわざとらしく少し間をとった。

「もちろん断ったよ、『彼氏がいるから』って」

「…いなかったらOKしてた？」

「んー…かもね。いい人だし」時折通り過ぎる車のライトが雨を立体的にあぶりだし、テールランプが路面に溶けて消えていく。

「やっぱりモテるんだね」

「私がモテるの嬉しい？それとも心配？」

「うん…よく分からない」ビニール傘の向こうで理沙の表情が曇る。

理沙が誰か他の男のものになるのは確かに嫌だった。だがそれは、掛け替えのないものを失うというよりは小学校の時の徒競走で二番だった時の悔しさに似ていた。

隆志の部屋は二階建てアパートの二階だ。各階に六部屋ずつあり、階段はハの字型に二つある。雨で滑りやすくなった階段に気をつけながら上がる。

前を歩く隆志の目線に人影が映る。隆志の部屋の前で座り込んでいる。その人影は足を止めた隆志に気付くなり立ち上がったが、その後ろの理沙の気配を感じて逆側の階段から逃げるように闇に消えていった。

覚えのある香り。ドアの前に出来た黒い水染みが、古井戸を思わせた。

隆志は隣で寝息を立てる理沙に布団をかけ直し、暗い部屋の天井を見つめる。あれは確かに美優だった。何故あんな時間にいたのだろう。彼氏と何かあったのだろう。今どこにいるのだろう。考えれば考えるほど、根拠のない使命感が隆志を支配した。目をつぶると玄関の前で寒さと孤独に座り込む美優の姿が浮かぶ。

理沙は寝返りを打って隆志に背を向けた。

「…ねえ、さっきの…誰…？」隆志は息を飲んで張り詰めた闇に身構えた。

今日の様子からして理沙は何かを知っているのかもしれない。その思いが隆志の返答を遅らせ、結果、空いてしまった間がさらに隆志を闇に押し込めた。

「…よく見えなかったから分からない」隆志がそう答えると理沙はそれ以上口を開かなかつた。

二人の間にある柔らかかかったものが硬くなり次第にすり減っていく。古井戸を這い上がってくるもう一人の自分を蹴落とす気力はもう無い。全てをうやむやにしていまいたい一心で隆志は目を閉じた。

翌朝目を覚ますと、理沙は隣にいなかった。キッチンにも風呂場にも。

冷たいシーツが終わりの始まりを隆志に告げたが、同時にその白さは隆志が今何をすべきかを明確にした。もう一人の自分の言葉に従い古井戸の泥を全て掻き出す。そこには冷たく柔らかい湧き水が顔を出し、あつという間に井戸を満たしていく。一月の寒さに動きを鈍くした部屋の空気を引き裂くように布団から飛び出し、なにかふっきれたように迷わず携帯電話を手にとると美優に電話をかけた。

いくらコールしても出ない。

午後からの授業のことは既に隆志の頭には無く、形だけのシャワーを浴びるとすぐに部屋を出た。玄関前の黒い水染みはもう無い。昨晚までの雨はすっかり止み、澄んだ青空の断片を水溜りが切り取って路面に貼りつけている。

取りあえず駅に向かい『るぱん』で美優からの連絡を待つことにした。入り口の看板には

『お通し（水）無料』

客は隆志だけだった。

一人で椅子に座る隆志を見て、マスターは入り口に視線を向けた。

「今日は一人なんです」隆志がそう言うと、スターは無言で頷いた。店内に漂うほろ苦く香ばしい湯気が昨日のことを思い出させる。

コーヒーを一口飲んで隆志はトイレに立った。鏡に写る顔を見て、隆志は久しぶりに自分を客観的に見た気がした。その表情は黄色電球の熱を微かに含み、その視線は鏡面を鋭く刺した。

テーブルに戻ると、鞆上の携帯電話が震えている。美優からだ。

「もしもし！美優、今どこ！」

「病院……」

「病院って。何で」静かな店内に隆志の声が響く。

「昨日……夜……倒れちゃって……」

美優は昨晚、隆志の部屋を訪れたが隆志が理沙と帰宅したのを見てとっさに逃げ出してしまったのだと言う。傘を持っておらず、もともと貧血気味なこともあり、一月の寒空の下で雨に濡れながら走ったところ、そのまま意識が遠のいたそうだ。幸い、通りがかった会社帰りのサラリーマンが救

急車を呼んでくれたので大事には至らなかったが、もし誰にも発見されなかった時のことを思うとあの玄関前で小さくなった膝を抱きしめてやれなかった自分が、闇に消えて行く背中を追いかけなかった自分が許せなかった。

「すぐに行くから！」電話を切りコーヒー代を払おうとカウンターの前に立つ隆志をマスターは低い声で諫めた。

「少し、落ち着きな」そう言って隆志が出した千円札を隆志に返した。

戸惑う隆志をカウンター席に座らせマスターは続けた。

「あの子が好きかい？」全てを見通したようなマスターの目は優しかった。

隆志は大きく深呼吸をしたあと、自分で確かめるように小さく頷いた。

「好きな子を幸せにする3つの条件を知ってるかい？」少し考えを巡らせたが隆志は首を横に振った。

「一つ目は愛されてると実感させてあげること」マスターは白いナプキンでグラスを丹念に拭き、その透き通ったグラスを隆志の前に置いた。

「二つ目は君を愛させてあげること」二つ目のグラスが置かれる。

「三つ目は……その子と幸せになる決意と不幸になる覚悟を持つこと」マスターは三つ目のグラスを置くと三つのポットを用意して、三つそれぞれに水を注いでいった。

「どれか一つでも欠けたらダメだ」そう言って隆志に飲み干すようグラスを差し出した。

無言で、一つずつ、味わうように、飲み干す。隆志の喉を通った清流は、そのまま心の井戸を豊かに潤す。三つ目のグラスに口を付けた瞬間、隆志の手が止まった。

「どうした？最後まで飲み干しな」三つ目のグラスを隆志が空けるとマスターは少しだけ笑った。



「人つてのは同じものでも気持ち次第で感じ方が変わってくる生き物だ。三杯目の味は、不幸になる覚悟をした上での君と彼女の未来がどうなるかが暗示されてるかもしれないな」

隆志も少しだけ笑った。

隆志は礼を言うのと店を後にした。美優のいる病院は駅から歩いて十分ほどの「青心堂病院」。一月の風は熱をまとった心と体を心地良い冷たさで撫でていく。進むべき方向が疑いもなく示された気がして、それが人とどう違っても、その違いにさえ隆志は帆を張っていけると思った。

美優がいる病室は三階の三一〇号室。美優が待っているのが他の誰でも無く、自分であることが隆志はどうしようもなく嬉しかった。エレベーターを待たずに階段を一段飛ばしで駆け上がる。三階に着き、肩で息をしながら廊下を歩く。美優がいる病室まであと数メートルのところ、男とすれ違った。

その男が出てきたのは、三一〇号室だった。

病室は左右に二つずつ、計四つのベッドがあった。南向きの窓から差し込む陽の光がベッドを囲む白いカーテンの上を緩やかに滑っている。

少し開いたカーテンから美優の顔が見える。美優は病室に入ってすぐ右側のベッドに病衣を着て上半身だけを起こしていた。他のベッドも入院患者が使っている跡が見られたが席を外しているらし

く部屋には美優一人だった。

普段から薄目の化粧だが今日は全くしていない。無防備であどけなさの残る美優のまぶたに井戸の水位が上がる。隆志に気付くとスイッチを入れたように笑顔になったが、隆志はその数瞬前の空虚で疲れきった眼の方が気になった。

「ごめんね、心配かけちゃって」

「もう平気なの？」

「うん、ただの貧血だし。昔からたまにあるんだ」

「そっか……さっき出て行った人って……彼氏？」

笑顔が消え、無言で頷く美優。

「昨日何があったの？玄関の前にいたの、美優だろ？」

「……迷惑かけてごめん」

美優はうつむき腰のあたりまで掛けてある掛け布団を強く握った。廊下を往来する有機的な機械音と湿った明るさが室内を埋める。

口を開かない美優とその頬を伝う涙の綺麗さに隆志は一瞬放心し、それ以上何を言ってもその雫に全てを吸い込まれてしまうような気がした。

少し休んで午後には退院できるといいうので隆志は病院を後にした。

美優と彼氏に何があったのか。気にはなったが今自分が出ることは美優を見守ることだと、隆志は自分に言い聞かせた。ついさっきまで燃え盛っていた炎は影を潜め、曇りだした胸をよそに我関せずと晴れ渡る青空の雲が遠くに感じた。

美優がいる病室は三階の三一〇号室。美優が待っているのが他の誰でも無く、自分であることが隆志はどうしようもなく嬉しかった。エレベーターを待たずに階段を一段飛ばしで駆け上がる。三階に着き、肩で息をしながら廊下を歩く。美優がいる病室まであと数メートルのところ、男とすれ違った。

その男が出てきたのは、三一〇号室だった。

病室は左右に二つずつ、計四つのベッドがあった。南向きの窓から差し込む陽の光がベッドを囲む白いカーテンの上を緩やかに滑っている。

少し開いたカーテンから美優の顔が見える。美優は病室に入ってすぐ右側のベッドに病衣を着て上半身だけを起こしていた。他のベッドも入院患者が使っている跡が見られたが席を外しているらしく部屋には美優一人だった。

普段から薄目の化粧だが今日は全くしていない。無防備であどけなさの残る美優のまぶたに井戸の水位が上がる。隆志に気付くとスイッチを入れたように笑顔になったが、隆志はその数瞬前の空虚で疲れきった眼の方が気になった。

「ごめんね、心配かけちゃって」

「もう平気なの？」

「うん、ただの貧血だし。昔からたまにあるんだ」

「そっか………さつき出て行った人って…彼氏？」

笑顔が消え、無言で頷く美優。

「昨日何があったの？玄関の前にいたの、美優だろ？」

「……迷惑かけてごめん」

美優はうつむき腰のあたりまで掛けてある掛け布団を強く握った。廊下を往来する有機的な機械音と湿った明るさが室内を埋める。

口を開かない美優とその頬を伝う涙の綺麗さに隆志は一瞬放心し、それ以上何を言ってもその雫に全てを吸い込まれてしまうような気がした。

少し休んで午後には退院できるといっているので隆志は病院を後にした。

美優と彼氏に何があったのか。気にはなったが今自分が出ることは美優を見守ることだと、隆志は自分に言い聞かせた。ついさつきまで燃え盛っていた炎は影を潜め、曇りだした胸をよそに我関せずと晴れ渡る青空の雲が遠くに感じた。

隆志は図書館に向かった。

何をしに来たかも分からないまま、無数に並ぶ背表紙の中に答えが書いてあるような気がして本棚の間を行ったり来たりする。

背丈の違う本が波を作る中で一段と低く薄い本の前で、隆志はふと足を止めた。

『愛』

隆志はその本を手に取り三階に向かった。「図書館の主」は今日もない。

名も無い作家たちの短編小説を集めたその本には「愛」をテーマにした物語がいくつも綴られている。目次に目を通すと、最後の物語に目があった。

『ホットコーヒー・アゲイン』

その物語は今までホットコーヒーを注文してきた彼女が別れを切り出す時にアイスコーヒーを注文するという話で主人公の男は席を立った彼女が残したグラスに浮かぶ氷を見つめながら過去を追想するという内容だった。

ふと理沙のことが頭をよぎる。

美優のことで頭がいっぱいになっていたが理沙とのこともこのままにしておくわけにはいかない。出すべき答えは分かっている。それがせめてもの救いだった。

その物語は最後の数ページが落丁していて結末が分からなかった。

隆志の携帯が震える。美優からのメールだ。

「今日は本当にごめんね。無事退院できた。」

「迎えいくよ、ロビーで待ってて。」

『愛』を本棚に戻し、隆志は図書館を後にした。

美優は入り口を入れてすぐ左側の壁、受付の正面に沿って並ぶ椅子に座っていた。遠くを見ている。隆志の好きな横顔だ。

長いまつ毛と少し蒼白い肌、すっと通った鼻筋と耳から顎への華奢な線。少し開いた薄い唇と重力に従って真っ直ぐ落ちる黒髪。その危うさは時の流れという絶対的な残酷さから奇跡的に逃れた芸術のようだった。隆志に気付くと少し申し訳なさそうにはにかむ。

美優の家までの道で何を話していいか分からない隆志を気遣ってか、美優はよく喋った。

「となりのベッドにいた人が面白い人でさあ、くだらないこといっぱい教えてくれたの」

「くだらないことって？」

「ゴキブリを退治するとき息を止めるといいんだって！その方が人間は素早く動けるんだって！」  
「その知識、年間何回役立つんだよ」

美優は車道と歩道を区切るブロックの上をバランスを取りながら歩く。

「これはすごいよ。目を開け続けて一切まばたきしなくても、目をグルグル回せば乾燥せずに痛くないんだって！」

「きっとその人、役に立たない順で美優に教えてるんだな」

「その人のお孫さんが開発した技らしいよ」

「血筋だな」

そう、これだ。美優と共有する時間の流れの柔らかさと心音を聞かせ合うような体温の通ったやりとりに隆志の頬は緩む。

「でも実際やってみたら本当に痛くならなかったよ、隆志もやってみなよ」

「俺はいいって」

「いいからやってみてよ」

仕方なく言われたとおりに目を開いたままグルグルと回してみる。

「何やってるの！信号青だよ、まったく」

「美優がやってみろって言ったんだろ」

美優がはしゃいで笑う。いつもの笑顔だ。横断歩道を渡る途中で、美優は何でもないことのように言った。

「わたし、フラれちゃった」

何かを急かすように信号が点滅し始めた。

横断歩道を渡り切るまで、世界は隆志に無音を貫いた。どうして？そう聞きたかった。しかし、隆志の口から出た言葉は違っていた。

「俺も別れたんだ」美優の表情は無理な作り笑いから一転、目を大きく見開いた驚きが変わった。

何故そんなことを口走ったのか、隆志は自分でも分からなかったが、美優の瞳がはつきりと焦点をを持ったことにその嘘の価値を見出した。

「どうして？もしかしてわたしが原因？」

「いや…」

言葉が続かない。だが美優が原因ではないことだけは明確にしておくべきだと判断した。

「何か：他に好きな人が出来たみたい」ごめん。隆志は心の中で理沙に手を合わせた。

「ふくん。じゃあフラれた同士だ。ヒツヒツヒツ…」

「何それ？」

「となりのベットの人の笑い方。可笑しいよね」

「変わった人なんだな、その人…」

あつ。隆志は思わず声を出しそうになった。前方に見覚えのある顔が近づいてくる。イタリアンレストランで働いていた理沙の友人の吉田麻衣だ。思わず顔をそらし下を向く。

ポケットに手をつ込み携帯電話を気にするふりをする。ちらっと相手を見ると隆志には気付いていないようだ。急にそわついた隆志を見てニヤツと笑う美優。

「知り合い？」吉田麻衣が通り過ぎたのを横目で確認してから、からかい半分の小声で囁く。

「まあ、そんな感じ」焦りが気化して体中の毛穴から抜けていく。

美優を家まで送った後、隆志はもう一度図書館に向かった。

窓際のいつもの席に腰を下ろす。窓の木枠をよく見ると、無数の落書きに気付く。それは感情の投影という言葉がよく当てはまるキャンバスだった。喜怒哀楽がところ狭しと書き殴られ、絶妙なバランスで一つの模様として空間に溶け込んでいた。もしここに何かを書き込むとしたら一体何と書くべきだろう。隆志は考えたが、実際に行動に移さないことを考えても仕方ないと思い直した。

ただ、実際やらなければいけないこと。理沙のことはそうはいかない。別れの言葉。



それを探す作業ほど虚しいものがあるのだろうか。感情と記憶が螺旋状に入り組み、それがまた幾重にも混じり合って隆志の中で膨れ上がっていく。限界まで膨れ上がると風船が割れるように弾け飛び一つの言葉が残った。

「好きな人ができた」

その夜、隆志はその言葉をそのまま理沙に伝えた。理沙は表情を変えずに口を開いた。

「今日、一緒にいた子でしょ？麻衣ちゃんに聞いた」

動揺が血流に乗って全身を駆け巡る。隆志はどうにか頷いた。

「どんな子？」わずかだが理沙の声が震えている。

「いい子だよ」

「じゃあ私はいい子じゃないんだ？」

返答に困る隆志を見て理沙は続けた。

「ウソウソ。仕方ないもんね、好きになっちゃったんじゃ……好きになっちゃったのか……」

下を向く理沙。手を伸ばせば届く理沙の肩。しかしもう、それを抱いてはいけない。二人を結んで

いた糸が色を失い、静かに解け、いつの間にか闇に紛れる。

それから二、三の言葉を交わし、二人は別れた。

隆志は歩いた。街灯と街灯の間に、一つずつ想い出をそっと落とすように。

理沙と初めて逢ったあの日、この日を覚悟していただろうか。隆志は追憶に気をやったが思い出せ

ない。ただ、泣きたいのに。ただ、涙が出なかった。

思い出せるのは理沙の涙だけだ。

隆志は自販機でコーヒーを買った。

硬貨を入れてから少しだけ迷って、アイスコーヒーを選んだ。  
ひどく苦かった。  
次の日も晴れた。

部屋に差し込む日差しは無差別であり、拒むことの出来ない絶対性に満ちていた。隆志はそれが後ろめたくもあり、有り難くもあった。

朝から美優のメールだ。

「おはー。今日となりのベッドにいた患者さんのお見舞い行くけど一緒に行かない？」

「まあ…いいけど」

素っ気ない返信とは裏腹に、朝から美優と繋がっていることで隆志の表情は差し込む日差しを受け止めるのに十分だった。

病院の入口で待ち合わせる。まだ美優に聞けていないことが頭をかすめる。あの夜、何があって隆志の部屋に来たのか。なぜ別れたのか。今日、聞こう。隆志は決めた。

遠くに美優が見える。もうすぐ美優の笑顔が見える。その瞬間に用意した言葉の全てが意義を失うことも、もう何度も経験している。

「オッス！」パーカーにキャップ。少しゆるいデニムと履き慣れたハイカットのスニーカー。今日の美優はボーイッシュモードらしい。

「おっす」隆志も返す。昨日より血色の戻った顔色に、隆志は安堵した。

三階に向かうエレベーターの中、閉ざされた小さな空間が互いに緊張をもたらした。誤魔化してきたわけではなかったが、踏み込まぬよう気を使ってきた島に二人で取り残された気分だった。深めに被ったキャップのせいで、美優の目は見えない。

二人とも扉側に体を向けたままだ。

「起きてるかな？」「どうかな」

三階という距離はその島での過ごし方を知るには短すぎた。扉が開くと、二人とも急いでエレベーターから降りた。長い間息を止めて潜水した人間が、最短距離で水面から顔を出さんばかりに。

三一〇号室。

「おばーちゃん、起きてる？」美優が隆志を先導して病室に入る。

隆志は言葉を無くした。美優の顔を見て笑っている初老の女性。初めて見る顔じゃない。

図書館の主だ。

「こ、こんにちは」隆志は突然の出会いに虚を突かれた。

ベットに横になっていた図書館の主は隆志を見上げると、いぶかしげに眉を寄せた。そして口元を微かに緩め、美優に視線を戻した。

「昨日の男の子と違うね」図書館の主はニヤツと笑って言った。

「昨日のは彼氏。もう別れちゃったけど。この人は友達。昨日も来たんだよ」

美優の単刀直入な解説が隆志の胸の芯を貫通していく。

「初めまして。広岡隆志です」

文字を読み起こしただけのような隆志の挨拶に、美優も図書館の主も声を出して笑った。

「初めてだったつけねえ？あんととは。私が知ってる子とよく似てるんだけど、歳だからね。ヒツヒツヒ…」

隆志は驚いた。図書館の主は隆志のことを認識していたのだ。

「図書館で、あの…」整理しきれない言葉が隆志の喉でぶつかり合う。

「まあ座ろ」美優は相変わらずのマイペースだ。

美優と図書館の主の他愛もない話は隆志の耳に届いていない。隆志は図書館の主と話がしてみたくて仕方がなかった。

図書館の主は時たま隆志をちらりと見ては、見透かしたように笑う。

「美優ちゃん、これでお茶買って来てもらえる？」図書館の主は美優に千円札を渡した。美優は少し腑に落ちない、といった表情のまま席を立った。

「図書館にいつもいますよね？」

「それはお互い様じゃないかい？ヒツヒツヒ…」

「まあ…そうですけど…」

図書館の主を近くで見るのは初めてだった。口元に印象的なホクロが二つある。端正な顔立ちからしても、若い頃は綺麗であったことが容易に想像できる。

「で、美優ちゃんとどうなりたいんだい？」

「えっ」

突然且つ、核心を突いた問いに隆志は答えあぐねた。そして何となく、するりと喉からすり抜けた言葉が口から出た。

「あつ、あの、『愛』っていう短篇集知ってますか？あの図書館にも置いてあるんですけど…」

「さあねえ、いろんな本を読んだから題名まではいちいち覚えてないよ。何でだい？」

「いや、最後のほうが落丁してて、結末が分からないんです。もしかしたら知ってるかなと思って…」

「悪いけど知らないねえ。何ていう題名の小説？」

「確か『ホットコーヒー・アゲイン』という題名です」

図書館の主はその言葉に予想もしなかったとでもいうように体を力ませる。図書館の主の瞳が、もの想いに少し濡れた。

「ほい、買ってきたよ」美優が帰ってきた。

「隆志はコレね」美優はヤクルトを二本渡してきた。

「何で俺だけコレなんだよ！」美優と図書館の主が大きな口を開けて笑う。

しかし、隆志にはそんなことよりも聞きたいことがあった。

「知ってるんですか？あの小説」

「うん、まあ…知ってるよ」

「どうなるんですか！最後は！」話の流れが掴めない美優は二人を交互に見る。

「そんなに面白くないよ」

「いいです！教えてください！」

「……結局フラれちゃうの、主人公の男は。でもその前にさ、その男と喫茶店のマスターとの絡みがあつてさ」

「どんな？」

隆志は何故こんなにもあの作品に惹かれるのか、自分でも分からなかった。きっと昨日の理沙とこのことがあつたからかもしれない。

「あんまりはつきりとは覚えてないけど……マスターがその男に水を三杯飲ませたりして……何だったかな……まあそれでもう一度告白しに行くんだけど、彼女は別の喫茶店で他の男とホットコーヒーを飲んでたって話だよ。下らないだろ？」

隆志は図書館の主の言葉を最後まで聞いていなかった。昨日、隆志はその物語の中にいた。

「しかし、あんな小説をよく見つけたもんだねえ……」

「へえー、そうだったんだー」美優が唐突に口を開く。隆志と図書館の主が美優を見る。

「三杯目だけ甘いんでしょ？それ」

「美優ちゃん、どうして知ってるの」

「うちのおじいちゃんがお店でたまにやってたもん。ガムシロがちよっと入ってるんだよね。おじいちゃん、その真似してたのかあ」

「いや……逆だろうね……」図書館の主の声色と眼光がみるみるうちに力強くなっていく。

「美優ちゃんのおじいさんのお店の名前はなんていうの」

「『じげん』。うちのおじいちゃん、あご髭がすごくてさ」

図書館の主は少し放心したような、それでいて突き抜けた清々しきで大きく息をついた。

隆志は昨日のことを話そうと思ったが、もうすぐ終わる面会時間がそれを留めた。

病室を後にし、再び二人きりになる。図書館の主と話せたことで、隆志は少なからず興奮状態にあった。

「隆志、どっかいく？」少し間をおいて答えた。

「何で別れたの？」

「うーん、だって言われちゃったんだもん」

「なんて？」

「『好きな人ができた』って」

隆志は体が硬直する感覚を覚えた。それは昨日、隆志が理沙に言った言葉そのものだった。

「隆志と駅で会った日に言われてさー。倒れたって言ったら一応お見舞いには来てくれたけど、あれつきり連絡もしてない」

「へえ：それで納得いくもんなの？」

「何が？」

「『好きな人ができた』って言われてさ」

「いかないよ。でも仕方ないじゃん？欲しいモノが必ず手に入るわけじゃないんだし。お茶飲みたなくてもヤクルトの時もあるしさ。まあ、ヤクルトも割と好きだったりするけど：その本読んでみたいな」

二人は図書館に向かった。

美優と来るのは初めてだった。二人は『愛』の前に立った。日に焼けた背表紙。最近では見かけな

い手書きっぽいフォント。美優はそれを手に取るとすぐに図書館のカウンターに向かった。

「この本、落丁してるんですけど、新調してもらえませんか？」

係員は一度奥に消え、数分後に戻ってきた。

「申し訳ございません。この本は現在、絶版になっておりまして…新しいものをご用意できない状態です…」

「そうですか…分かりました…」やっぱりそうか、という表情だった。

「これ、借ります」貸し出しの手続きを済ませ、図書館を出る。

二人の足は自然と『るばん』に向かっていた。夕日が朱に染めた空を、鳥の群れが規則的な隊列で横切る。

「あつちに何かがあるのかなあ」美優らしい質問だ。

「あの方角だと…俺の家だな」

「じゃあ帰ったら糞だらけだね」

伸びた影がアスファルトの上で重なりあう。

今日の看板の文字は

『マスター募集中！締め切り間近！』



二人は目を見合わせて笑う。

いつもの二人掛けの席に座る。そこで美優は初めてキャップをはずした。透き通った白い肌が隆志の視界を一気に支配する。

隆志はグラスに水を注ぐマスターの背中に話しかけた。

「マスター、『ホットコーヒー・アゲイン』って小説を知ってますよね？」

マスターは手を止め、隆志の方をゆっくり見て、すぐにいつもの表情に戻り小さく頷いた。

「どこで読んだんだ？あんなもの」「図書館で。ほら」隆志は美優に『愛』を出すよう催促した。

マスターはそれを手に取ると、表紙の『愛』の文字を親指で一擦りして、最上階の窓から黄昏に染まりかけた街並みを眺めた。ページをめくると落丁に気付いた。

「最後が無くなってるのは、よく俺が書いたって分かったな」

隆志も美優もその言葉を理解できなかった。

「えっ？マスターが書いたんですか？」

「何だ、知ってたんじゃないのか。若い頃は作家を目指してたんだ。まあ、才能はなかったがな」  
いつになく、マスターは饒舌だ。

「でも、どうしてこの小説が俺と関係あるって思ったんだ？続きの部分がなきや分からなかっただろうに」

いまいち要領を得ない美優を置いたまま、隆志は早口で喋った。

「ある女性が続きを教えてくれたんです」

それを聞いて、マスターの宙に浮いていた視線が意志を持ったものになり隆志に注がれた。

「その人は……どんな人？」

「目鼻立ちのすつきりした初老の女性って感じの方です」

「……もしかして……口元にホクロが二つあったかい？」

「知ってるんですか？あの人のこと」

分からないながら美優も驚いている。

マスターの口元が微かに震えている。彼の中で何かが弾けた、隆志はそう感じた。

「……この物語に出てくる女性は彼女なんだよ……主人公は……俺だ。恥ずかしいが実話を元にしたんだ。そうか……彼女は元気かい？」

「『青心堂病院』に入院してますが、元気だと思います。あつ、ちなみにこの子が『じげん』のマスターの孫です」

美優を見るその丸い目は、美優の祖父と美優を重ねているようだった。

「ちよつと腰を下ろしてもいいかな……」急すぎる展開にマスターは必死に頭を整理しようとしていた。

マスターは向かいのカウンター席に腰を下ろしてしばらくすると、入口の札を「closed」に替えた。入り口から席に戻るマスターがまとう空気は老紳士というより、まだ感情の抑制が利かない少年のようだった。

「この子があの『じげん』のマスターのお孫さんで、佐知子……君にその話をした女性の名前は佐知子と言うんだが、佐知子が君たちの知り合いとはな……」

顔のしわに刻まれた時の長さをふうつとついた息が優しく包んだ。

「美優が入院してた病室がたまたま一緒で」

マスター程ではないにしろ、隆志もまた人生の巡り合わせの不思議を感じていた。知らず知らずに

離れていく道もあれば、離れても再び交じり合う道もある。ただ、誰もその行方は知らない。

「そうか：でも、あいつ：読んでくれたんだな：」

「なになに？マスターとおばあちゃん知り合いなの？」

マスターの美優を見る目がいつになく優しい。

「まあ、そんなところだな」

「じゃあ会いに行けば？すぐ近くじゃん」

少し困った顔でマスターは首を横に振った。

「マスター、若い頃モテなかったでしょ？素直じゃないとモテないよ」

「さすがあのマスターのお孫さんだ。お見通しだな」

笑いながら美優の頭を撫でるその目には遠い夕日が滲んでいた。

「ありがとう：」

マスターは低い声で二人に微笑み、カウンターの奥に戻った。薄暗い店内にほのかな間接照明が灯る。

「マスター、私ホットね。隆志は？」

「うん。俺も。ちよっと甘いのを」

あと少しで約束の15:00だ。

今日は昼から雨だ。隆志は駅の改札にもうすぐ来るはずの美優を待っている。傘は一つ。

二人は今日も『るぱん』に向かったが、入り口で引き返した。

『るぱん』の入り口には「closed」の札と、椅子の上の看板に一言。

「不二子に会ってきません」

おしまい。

布団くんブログ

絶対に抜け出せない布団が、そこにはある。 <http://futonkun.blogspot.jp/>